

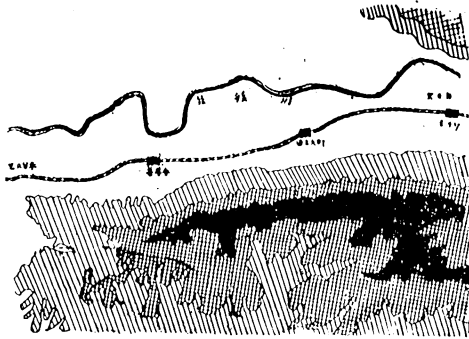
# 防風壁の研究 (Ⅱ)

理学博士 鈴木清太郎

農林省農事試験場九州支場

福岡縣浮羽郡の耳納山脈は郡を東西に筑後川に略々平行に衝立の如く聳立する。長さ16軒前後、最高800米の鷹取山の左右に殆んど均一の高さの山嶺が續き、南方は山嶽重疊、北方は急坂して後筑後平野の一部を形成する。

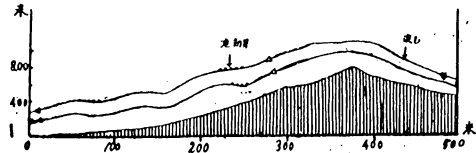
第 1 圖



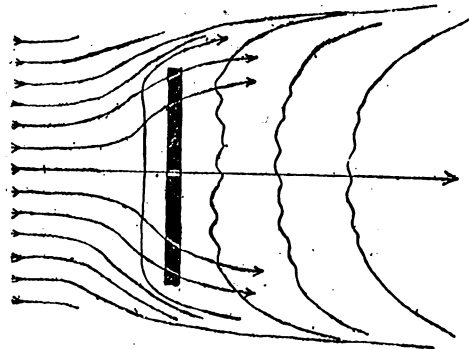
隨風がこの地方の南方を通過して北風すさむも、稻の倒伏少なく、却つて低氣壓が北方を通つて南風起るとき麥の被害顯著である。即ちこの山は普通の防風壁

と全く異なり、風は山陰の風下が強く、山の面の風上が弱いと云ふ逆理を行くものである。

第 2 圖



第 3 圖



---

今水流が垂直に立てた板にせかるる模様を見るに、第2、3圖に示すように水上の板にせき止められるところは幾分水流が停滯して速度を弱め、水が瀑となつて落下するところは水勢盛んである。然し若し水量増加して板の高さを遙かに越すとこの効果は薄弱となつて一様に水は下方に向つて流れ去るであらう。

---

大氣流が山嶺に衝突して上の効果を起す時も、同様に上層に暖氣層、下層に冷氣流あるを必要とし、更にその境界面が耳納山脈と略々同高にある事が要求される。即ち氣温の逆轉が山の平均高500—600米前後に生ずる事がこの現象の必要な條件である。